



メダカの卵を、なぜすぐに親と別々にするの

メダカの産卵は夜明け

メダカは、春から秋にかけて、水温が18℃以上になると、卵を産みます。メダカが卵を産む時間は決まっています、明け方です。メスが産んだ卵は、糸のようなものがついていて、水草などにくっつきます。

この卵やメダカの子魚を、親と同じ水そうに入れたままにしておくと、メダカは、えさとまちがえて、食べてしまいます。そこで、卵のついた水草を別の水そうに移してやるのです。

親とは別の水そうに移した卵は、そのままそっとしておくと、水温が20℃ぐらいなら10日ほどで、卵がかえります。ふ化したメダカには、ゆで卵の黄身や、キンギョのえさをすりつぶしたものを水でといて、1日に3～4回、あたえます。親の体の3分の2ぐらいの大きさまで成長したら、親と同じ水そうに入れてもだいじょうぶです。

メダカは飼いやすい

メダカは、底にじゃりをしいただけの水そうで、飼うことができます。気をつけるのは、水道水をバケツなどに入れて1日以上置いた水を使うことと、水草を植えこんでやることぐらいでしょう。えさは、売っているキンギョや熱帯魚のえさ、イトミミズ、アカムシ、ミジンコなどを1日に2回ぐらいあたえます。食べ残しが出ないように、えさの量をかげんしましょう。（監修・安部 義孝）

